

第3回 いわき市復旧・復興計画検討委員会 議事要旨

I 開催日時：平成23年 8月 5日（金）13:30～16:00

II 開催場所：いわき市文化センター 大講義室

III 出席者

1 検討委員会委員（五十音順、敬称略）

職名等		氏名	出欠
筑波大学大学院	システム情報工学研究科 講師	梅本 通孝	出席
東日本国際大学	福祉環境学部 教授	遠藤 寿海	出席
いわき商工会議所	会頭	小野 栄重	欠席
福島工業高等専門学校	建設環境工学科 准教授	齊藤 充弘	出席
いわき市立総合磐城共立病院	病院事業管理者	平 則夫	欠席
日本大学	副総長・工学部学部長	出村 克宣	出席
いわき明星大学	科学技術学部 教授	東 之弘	出席

2 事務局出席者

職名等		氏名	
副市長		伊東 正晃	
行政経営部	部長	大和田 正人	
	復興監	前田 直樹	
	次長	阿部 直美	
	次長	佐藤 克房	
	行政経営課長	鈴木 善明	
	復興支援室長	園部 衛	
	危機管理課長	緑川 伸幸	
	行政経営課	課長補佐	緒方 勝也
		係長	木田 努
主査		山形 裕之	
主査		中根 政敏	

IV 次第

○ 第3回委員会

1 開会

2 議事

復興ビジョンの検討

- ・ 論点1 サブタイトル(キャッチフレーズ)「がんばっぺ!いわき」について
- ・ 論点2 「復旧・復興の目的」について
- ・ 論点3 「目的達成に向けた復旧・復興の視点(理念)」について
- ・ 論点4 「推進期間」について
- ・ 論点5 「主な施策」(「取組の柱」と「主な取組み」)について

3 その他

4 閉会

V 主な内容

(1) 論点1 サブタイトル(キャッチフレーズ)「がんばっぺ!いわき」について

議長：このサブタイトル(キャッチフレーズ)については、今後の協議をまとめる中で、設定するかどうかも含めまして協議したいと思いますが、いかがでしょうか。

(各委員)：異議なし。

(2) 論点2 「復旧・復興の目的」について

議長：今回は、特に「安心」という言葉について意見があったが、そのあたりを検討したい。

委員：「安心」というのが最終目標になる。そのために何の安全を確保するのかというところが、この後に入ってくると思うが、安全を確保したから安心になるので、文言としては、並んでいても問題はない。概念としては、「安全」よりも「安心」の方が上位にある。概念を説明できるようなものがあれば、言葉として掲げるのは問題ない。

議長：このあとの論点3の中で、安全・安心できるまちを目指すとする。この中で具体的にになっていくのかと思われる。

委員：「安心」は一人ひとりの感覚であって、行政としては、市民一人ひとりに安心してもらえるようにするという目的になる。押付けでは問題だが、市民一人ひとりに安心を感じてもらえるように、そこへ近づけるようにするという意味で、政策目標としてやっていく分にはこういう使い方ではない。

委員：安全のためにはどういうことを行って、その結果、安心ないわきというのはどのようなイメージになるのか、そういったつながり方が大事である。安全面での目的を明確にして、だから安全であるというようにしていく必要がある。

委員：目的としては、安全・安心は違う言葉だが、ペアになっても良く、特に違和感はない。ここは大きな目的立てのところなので、抽象的にはなるが問題はない。逆に安全と安心の片方だけであると問題ではないか。この目的に対してどんな施策を展開するかが大事である。

委員：ここは目的であるので、安全・安心を掲げることに問題はない。

委員：目的であるので、言葉の使い方はおかしくはない。具体的に何の安全かというのが後で説明される必要がある。

議長：目的2については、いかがか。「震災よりも更に活力を備えたまちの創造」についてである。

委員：目的ということであれば問題ない。むしろ、他に掲げるべき事項があるかどうか気になるところである。いわき市独特の目的を何か掲げるべきかどうか。

議長：目的2自体は問題ない。他に何かあるか、いわきらしさという、独特なものという点でどうか。復旧・復興というのが目的であるので、この2つで表していると思う。

委員：無理やりもう1つ目的を掲げるということではない。2つの目的には問題はないので、議論するとすれば、いわき市独特のものといったところになるかと思われるところである。

委員：目的については、このままでいいと思う。ただ、目的2の「震災前よりも更に～」という表現が気になる。震災前は活力がなかったように思われるのではないか。今はこのままで良いが、議論の中で出てくるようであれば検討したい。

議長：他の委員の方々はいかがか。個人的には「震災前」という言葉はなくてもよいと考える。

委員：現状認識のところ、人口が減っているなどの説明もあり、活力が低下する傾向はあったと思われる。その意味でこのような表現になっていると受け止めている。今回の震災は大きな事件ではある。しかし、今後10年程度は影響を受ける話であるが、震災という言葉にこだわるのはどうか、もう少し前向きな感じにしてもよいのかなと思う。このままでも間違っていない。

委員：「活力」をどういう部分に求めるかということにかかってくるが、「活力を備えたまちを新しく創造する」というような表現のほうが、何か新たにやっていかななくてはという意識を市民も持てると思う。

委員：前向きになれる形が良いと思われる。「まち」には「ひと」も入ると思われる。まちもひと元気になれるというようなものが良い。

委員：「まち」の創造というと、教育という言葉が入っていない。人づくりの視点の言葉があっても良い。「まち」という形になるものだけが復興ではなく「ひと」の部分も必要である。「まち」という言葉が抽象的で、人それぞれ感じ方が違う。

委員：都市計画の分野では、ひらがなの「まちづくり」はハードだけではなく、地域コミュニティをつくっていくなどのソフト面も含めての意味である。

「まち」がそういう意味で使われているのであれば、ハード・ソフト、「ひと」のことも含めたものと認識している。一般の方が見たときに「まち」という言葉で「ひと」や「きずな」といった部分が手薄であると思われるのであれば、「ひと」、「きずな」といった点を入れてもよい。

議長：目的として掲げたときに、分かりやすさも大事であるので、「ひと・まち」の創造というのはいかがでしょうか。

委員：ここでは、「ひと」という言葉を入れるのはうまくない。例えば、10年後でも通じるようにと考えると、「活力に満ちあふれたまちの創造」というと、非常に抽象的にはなるが、人間活動もイメージしやすいのではないかな。ただ、文章を見たときに市民が共通認識できるような言葉を選ぶ必要はある。

委員：「震災前」は入れる必要がある。震災からの復興のビジョンであるので、震災を抜きにしては語れない。もし、10年後に感覚的に感じなくなるのであれば、それは復興はかなったものとして捉えられる。その場合、通常の都市計画のマスタープランなどで、まちづくりの目標を掲げていけばよい。

議長：「震災前」というところ、ほかに意見はあるか。

委員：「まち」というひらがなの表記がある程度認識できるようになればよい。

委員：目的として、こういうものを掲げて、施策としてどのようなものになっているかが重要なので、これでも良い。問題は施策であるので、中身を詳細に見ていく方が大事である。

議長：概ねこの形で良いということで整理し、先に進む中で協議していきたい。

(3) 論点3 「目的達成に向けた復旧・復興の視点（理念）」について

① 視点（理念）1 「オールジャパン」「オールいわき」による復旧・復興

委員：視点の下にある箇条書きによる文章は今後も併せて示されていくという理解でいいのかな。

事務局：ビジョンとしてまとめていく方法にもよるが、背景等については文章で示したほうが市民に伝わると思われるので、そういった方向で整理したい。

委員：そういうことであれば問題はない。

「オールジャパン」という言葉だが、中越地震のときは、「企業の垣根を越えて」という意味合いで使用されたものであり、必ずしも国民一人ひとりというところまでは至っていなかったと思う。これを「オールいわき」に当てはめたときに、市民一人ひとりという意味になるか疑問があったが、視点の下の説明があれば、理解しやすいものと思われる。

委員：「オール」という言葉は辞書には載っているのか。言葉の感じは悪くないが、「オール」という形容詞が国語辞書に載っていればよいが。

委員：広辞苑に「すべて」という意味で掲載されている。

委員：「オール」については、盛んに使われている言葉であり、違和感はない。
その下の説明のところに各所からの連携が必要と記載されているが、市として、市民レベルで他市から何を助けてほしいのか、その辺を具体的に示していく必要がある。そうしなければ、「オールジャパン」の意味が薄れてしまう。

委員：この箇所では、「オールいわき」「オールジャパン」はあるが、県がない。いわきが一つになってやっていきたいと思いますということであれば、「オールいわき」だけでもいい。そこから全国へ発信するのは次の話ではないか。「いわき」の次が「日本」というのは違和感がある。福島県には頼らないというようにも見える。

事務局：「いわき」の次は「福島県」も含めた「日本」という意味合いで記載したものである。

議長：「いわき」以外のすべてを含む「ジャパン」という形になっている。視点の解説があるので、イメージはしやすいと思われる。

委員：市は何をしていくのか、そして、県や国にどういったところで協力を求めていくのか。その辺を柱に明示していく必要がある。それには施策の中での検討が必要になる。視点ということでは良い。

委員：3番目の説明で、「市内の力のみではなく」は、「市民の力のみではなく」ではないのか。

事務局：2番目の説明で、あらゆる機関と一体となり対応としている。3番目の説明の「日本全国の連携・協力」とするために、「市内の力」という表記にしたものである。

議長：何か他の言い方もあると思う。

委員：3番目の説明で、「市内の力のみではなく」という部分について、2番目の説明で表現されているので、この部分を取ってしまう。そして、「日本全国からの連携・協力が必要」という部分については、「市が明示的に発信し、それに応えていただけるようにしていく」というようにしてはどうか。

委員：そこ（「市内の力のみではなく」）を削除すると、他力本願的な意味合いが強くなる。再生・復興という観点からすると、「日本全国から～」の前に「更に」と入れると、それほど他力本願的にはならないと思う。

委員：2番目の説明で、「行政・市民・企業・高等教育機関等」という表現をわかりやすく、ここは「オールいわき」としてしまった方がよいのではないか。

委員：2番目の説明については、「～高等教育機関等が一体となり、「オールいわき」として～」とするのはどうか。

議長：まとめると、2番目は、「～高等教育機関等が一体となり、「オールいわき」として、～」という修正を図る。3番目については、「～必要となる」がキーワードになる。

委員：3番目は、「いわきをとりまく「オールジャパン」の連携・協力が必要となる」という表現ではいかがか。

委員：「いわきを中心とする」という言い方もある。

事務局：視点（理念）の補足の表現については、これまでの委員からの意見を踏まえ、整理したい。

② 視点（理念）2 災害に強く、安全で、安心できるまちを目指す復興
(特に意見等なし)

③ 視点（理念）3 前例のない複合災害からの再生モデルを世界に示す復興

委員：説明の1番目は必要な項目であるが、2番目については、分かりにくいところがある。背景と取り組むことの整理が必要である。

事務局：表現については、市民が分かりやすいようにしたい。

議長：委員からの意見には、「世界」という表現は大げさという意見があった。

委員：「世界」という表現は良い。下の説明には、具体的で分かりやすい方が良い。

事務局：表現は整理したい。具体的な説明を入れると、柱の部分と混同されると考えたものである。

④ 視点（理念）4 住む人も住む場所も世界から愛されるまちを目指す復興

議長：「世界から」ではなく「日本から」という意見があった。しかし原発災害を考えれば、「世界から」という表現も良いと思われる。

委員：海外のニュースでも福島は報道されているので、「世界から」という表現で良い。「原子力災害対応の最前線基地」という表現だが、戦争の最前線と意味がかぶる。表現を工夫した方が良い。

議長：表現を検討する必要がある。

⑤ 視点（理念）5 原子力に依存しない社会を目指すとともに、原子力災害を忘れず、受け入れ、克服する復興

委員：前半の「原子力に依存しない社会を目指す」というのは問題ない。後半の文章が妥当かどうか、本委員会のみで決めるのはどうかと思う。10年はこのビジョンが残ると考えると、いろいろな人の考えが入るようにした方がよい。「原子力災害を忘れず」といったところでも、「忘れてはいけない」という人と「早く忘れない」という人もいるだろう。

委員：この場だけで方向性を決定するのは重い感じがする。できるのであればもっと議論を深めた方がよい。

別な面からの話だが、ビジョンは一般的にポジティブに作るのが良い。視点1～4は前向きな話だが、視点5については、方向性として、ネガティブな印象を受ける。「脱原子力」に向かう方向性としては、「再生可能エ

エネルギーの導入」といった表現でも同じであり、その方がポジティブなものになる。ただ、ネガティブな表現であったとしても、それが市民の思いであるならば、それでも構わないと思う。

委員：視点が5つあって、その後に括弧書きで単語を表記している。流れで考えたときにどうなるのか。今回のビジョンの中に原子力については欠かせないものであるが、この場で決めるのは難しいとも思われる。

委員：与党の中でも安全な原子力ならいいという人もいる。そのくらい今後の原子力政策については、国でも方向性が分からない状況である。

日本はエネルギー資源がないので、最終的に再生可能エネルギーへ向かうとしても、つなぎとして、原子力発電を使わざるを得ない状況にあると個人的には思っている。

今後、10年間で再生可能エネルギーに移行するののかというと、現実には難しい。今回、ここで「脱原子力」と書かなくても、そういう方向に向かっているのだから、「再生可能エネルギーの導入を進める」として、「原子力には依存しない社会」とするほうがよい。

委員：感情的には、原発のような危ないものは遠ざけたいという思いがある。しかし、原発に絡む雇用問題もある。その辺のバランスを取っていく必要はあるだろう。多くの人に意見を聞くと意見が2つに分かれてしまって、市としての方向性が決められなくなってしまう。少なくともエネルギーをどの方向に進めるかという点と原子力災害の対応をしっかりとやっていくという方向にした方が具体的な施策に表せるのではないかな。

議長：いわきの復興を考えたときに原子力災害のことは外せない問題である。引き続き検討していく必要がある。

委員：視点5の表記は「忘れず、受け入れ、克服」となっており、その下の説明では「向き合い、克服」となっているが、何か意味があるのか。

事務局：説明については前回までの意見を踏まえて表記した。今回の議論も含め、最終的には市民がより分かりやすいように表記していきたい。

委員：「受け入れ」よりは「向き合い」の表現の方が良い。

委員：「忘れず、受け入れ」を取り、「克服し、新エネルギーを目指す復興」とした方が良い。

(4) 論点4 「推進期間」について

委員：特に問題ないと思う。

議長：中身が見えるようにすることも大事。柱のところで検討するようになる。

(5) 論点5 「主な施策」(取組の柱と「主な取組み」)について

委員：全体を通して見たときに、前の「推進期間」では復旧期が3年というように示されているが、「主な取組み」がいつ頃までにすべきものなのか説明がない。実際に何年までというのは難しいと思うが、取組み内容を復旧期・復興期に分けて整理する必要がある。

「柱1」についてだが、市民は赤ちゃんから老人までいろいろな人がおり、その置かれた状況によって、今回の震災により様々な問題を持っている。そうした一人ひとりに向けての言葉が足りない。例えば、元の学校へ戻ってという記載があるが、元の学校へ戻っただけでは不十分であり、戻った学校で安心して教育を受けることができるかどうか、そういった視点も必要である。特に保育所・幼稚園関係については、保護者の不安も大きいところなので、そういった視点も盛り込んでいくべきである。

議長：期間については、可能な部分については、示すことも必要である。

委員：視点1～5と柱の関係が分からない。関連性を示してほしい。

事務局：目的を達成するための理念、それに基づく取組という形になっている。関連性については示していきたい。取組みの時期については、今後策定する事業計画の中で示していきたい。

委員：全体の関係だが、視点と柱の関係は視点が柱を取り囲んでいくというイメージになる。そう考えると分かりやすい。更に、原子力のことを考えると、年齢別の取組みが必要ではないか。柱がもう少しあっても良い。経済と産業だけが単語としてある。これと並ぶ言葉、例えば教育とか、そういったものを柱に加えてもよいのではないか。

議長：「柱1」の内容がかなり広いものになっている。

委員：教育とか、ひとづくりなどの内容が柱のひとつになっている必要がある。中に組み込むのではなく、取り出して柱にするべきである。

委員：実現可能性を見据えた内容であるべき。時期の設定は必要である。例えば、心のケアや住宅の確保は当然復旧期に行われるものである。そういった区分は必要である。

柱については教育・福祉あたりを追加する必要があるのではないか。

委員：「子育てと教育」、「医療と福祉」といったものを柱として追加できると思われる。中身については、現在示されているものから抽出すればよい。

委員：あまり細かくしても柱にならない。子育て・教育、医療・福祉といった面は検討していくべき。

議長：柱2、柱3はどうか。

委員：柱3は、「経済・産業」の項目だが、ここに観光の面を追加すべき。

議長：柱4「原子力発電所災害からの再生・創造」はどうか。

委員：原子力災害については、全ての柱に関わってくる問題である。これを柱とする必要はない。柱5についても内容は事務的なものである。柱として設定しなくてもよいのではないか。全体を組みかえれば見やすくなる

のではないか。

委員：柱3で示されている、太陽光発電などの記述はどういう意味があって列挙してあるのか。

事務局：再生可能エネルギーについては、施策として積極的に取り組む必要があると認識しているところである。太陽光発電、洋上風力発電、木質バイオマス発電については、本市で再生可能エネルギーを実施するとした場合の代表的なものとして列挙したものである。

委員：柱4に医療に関する記載がないが、柱2にあるからそれでいいということか。

事務局：医療については、それぞれ必要な事項について、柱1、2、3で整理したところである。

委員：モニタリングは確かに大事なことであるが、この後に健康診断などの対応まで記載してはどうか。その方が市民は安心するのではないか。

議長：再生・創造という観点から研究機関を誘致するという意見もある。復興庁といった意見もあったが。

委員：そういったことを記載するとすれば、いわきを原発事故からの復興の拠点となるようにといった書き方もあるだろう。

事務局：研究機関の誘致については、柱3に記載している。柱4にも密接にかかわってくるものである。また、柱4自体もどうかという意見が示されている。その辺を踏まえて整理したい。

委員：柱4が違和感があるとの意見について、確かにこれはすべてに関わってくる。視点（理念）と具体的な取組み、5つの視点から見てこういった柱があるということが分かりにくい。原発の関係については、柱として他の取組みと並列にするのではなく、土台にするといった形がよい。

委員：原発への対応については、いわきでなくてはできないこともあることから、この点は外せないが、取組の柱ではなく、土台とするという考えはある。

委員：柱5について、外した方がよいとの意見があったが、逆にこの柱はあった方がよい。しかし、「復興の推進にあたって」の「あたって」は削除すべきである。

議長：全体を通していかがか。

委員：全体の話だが、様々な分野にわたる復興、さらには原子力災害への取り組みを進めるにあたっては、一部署で出来ることではないので、組織の再編・強化というのは確かに必要である。国・県との連携があるなら、庁内連携というか、庁内一丸というようなアピールをすることも必要ではないか。

委員：こういった施策を進めるにあたっては、財源をどうするかというのが問題となる。財源がないからできないというわけにもいかない。金融機関との連携やファンドを構築してやっていくかなど、どうやって資金的な問題

を解決するかといった検討も必要である。

委員：取組みの柱の施策について、その設定のプロセスを説明することも必要ではないか。取捨選択のプロセスが見えると、主な取組みの位置づけが明確になる。

委員：視点5での脱原発が駄目なら、柱4をそこに置き換えて、括弧書きの部分を「再生」というようにするのはどうか。

委員：こういった計画は作って終わりになるといった恐れが個人的にはある。いわきの姿を世界に発信していくということであれば、進行管理を行い、効果等の検証も必要である。

(3) その他（今後のスケジュールについて）

- ・ 第4回委員会については8月12日（金）午後1時30分から実施する。
- ・ 第5回についても、当初のスケジュール（案）のとおり、8月26日（金）に実施することとした。